

International Theatre Institute ITI

World Organization for the Performing Arts



インターナショナル・ダンス・デイ 2026

クリスタル・パイト (振付家/カナダ)

人は動きます——腕は伸び、膝は崩れ、頭は頷き、上体は丸まり、背中は反ります。そして跳び、肩をすくめ、こぶしを握りしめ、互いを抱え上げ、そして突き放し合います。これらは行為であると同時に、言語でもあります。要求、敗北、勇気、絶望、欲望、喜び、矛盾、いらだち、愛について、私たちは身体を使って語るのです。身体によるこうした概念の表現を理解できるのは、私たちがそれを身体の中でとても純粋に感じてきたからです——人は心を動かされてきたのです。

私たちは皆、ダンサーです。人生に突き動かされ、踊らされるダンサーなのです。息のようにはかないものから、骨のように確かなものまで、私たちからダンスは生み出されます。私たちは空間を彫刻します。私たちは、深く理解される無言の言語を身体によって書き出します。私たちはダンスによって自分の内面と外の空間の両方を優美さで満たします。

人生と同じように、ダンスは一瞬ごとに自らを生み出し、そして解体していきます。愛と同じように、ダンスは理性を超えていきます。

私は身体を、ひとつの場所、存在がそこに宿り、形づくられる場所として考えることにしています。ダンスするとき、私たちはそこに存在することに深く関わります。

私がこのメッセージを書いている 2026 年前半の今。私たちの世界には終わりが見えないような抑圧や激動や苦しみがはびこっているように思えます。日々、私たちは人間が互いに対してなしうることの恐ろしさを目の当たりにし、そして、人類と地球への筆舌尽くしがたい暴力に資金を与え、それをあおり立てる権力の機構を目撃しています。そうした中では、ダンスは安直で無力な応答しかできないように感じられます。これほど根本的な変化と安心感を強く必要としている世界において、ダンスアーティストに何ができるのかについて考えるのは難しいことです。

それでもなお、芸術は、希望と同じく、愛のひとつの形です。冒瀆に直面してさえも、あえて創造的であろうとする芸術は、硬直していく心をほどいていく溶媒であり、癒やしを与える香油でもあります。芸術は、私たちが問いと格闘するあいだ——共に——私たちを受け止める器です。

そのあり方は、ニュースとも、ドキュメンタリーや教育とも、意見表明やソーシャルメディアとも、アクティヴィズムや抗議とも異なります。しかし、それらと両立しないわけではありません。

創造性を通して、私たちは勇気、好奇心、優しさ、協働という小さな行為を積み重ね、抵抗する力と希望を蓄えていきます。ダンスの中に、そしてダンスを創る営みの中に、私たちは、人類が近年の胸が張り裂けそうな世界的失敗だけの存在ではないという証明を見いだします。

しかし、ダンスに正当化や説明が必要というわけではありません。ダンスは私たちからできているけれど、私たちに何も負っていないのです。ダンスに必要なのは、意志する身体に宿ることだけです。身体という場所から、ダンスは言葉にできないものを翻訳し、私たちと未知なるものとのあいだを取り持つ媒介者となるのです。

私たちは、瞬間ごとに現れては消えていく美の痕跡に心を動かされます。そして、ダンスそのものとその消失の両方を身体として生きるとき、私たちは自らのはかなさを感じざるをえません。ただそのとき、もし私たちが注意深くあるなら、ダンスは魂を垣間見せてくれることもあるでしょう。

(翻訳 荻野哲矢)

Translation : Ogino Tetsuya